

令和8年度第3回生駒市関係人口施策検討会 会議録

開催日時 令和8年8月4日(火) 10時～12時

開催場所 オンライン(生駒市コミュニティセンター202 会議室)

出席者

(参加者) 佐藤座長、井上氏、河尻氏、坂本氏、高津氏、高橋氏、棚橋氏 (五十音順)

(事務局) 村田公民連携推進課長、大垣公民連携推進課課長

神所公民連携推進課ふるさと応援係長、高山公民連携推進課ふるさと応援係員

(傍聴者) 1名

議事内容

1 開会

2 案件

(1) フィールドワークを踏まえた生駒市の地域特性

(2) 生駒市における関係人口の定義と目的

(3) 関係人口施策における行政の基本姿勢

(4) 既存の取組を含めた施策メニューの考え方

(5) その他

3 閉会

以下、発言要旨

1 開会

2 案件

(1) フィールドワークを踏まえた生駒市の地域特性

【事務局】 (事務局から説明)

【座長】 フィールドワークを通じて感じた、生駒市の特徴や活動が生まれる環境についてご意見をいただきたい。私が改めて感じたのは、生駒市の空間的な多様性である。南北に細長く、山や谷が連なる地形を持ち、東大阪だけでなく四條畷市や交野市方面ともつながりがある。また、南部には歴史や文化、豊かな自然が残る地域もあり、ベッドタウンという言葉だけでは捉えられない多様な地域資源を有していた。

【参加者】 住宅都市というイメージを持っていたが、実際に訪れると、エリアごとの特徴が大きく、一つのイメージでは捉えにくいまちだと感じた。そのため、市全体を一つの方向にまとめる施策には難しさもある。また、市民活動は、行政から求められて行うのではなく、自身の思いや暮らしの中で感じたことを起点に、自ら生み出されている

ことが印象的だった。良い意味で、自分たちの活動に対する誇りやこだわりを持ったまちなのだと思う。今後の関係人口施策も、広く一律に関わりを求めるのではなく、生駒の魅力や価値観に共感する人と丁寧に関係を築くことが重要ではないか。

(2) 生駒市における関係人口の定義と目的

【事務局】 (事務局から説明)

【参加者】 生駒市の関係人口を考える前に、国がなぜ関係人口施策を進めているのかを整理する必要がある。地域創生 1.0 では移住施策が中心に進められてきたが、人口流出を止められず、その後、関係人口や二地域居住へと軸足が移ってきたと理解している。ただし、現在の人口流出は「都市への憧れ」ではなく、仕事や産業の不足が大きな要因であり、関係人口だけでは課題解決にはつながらない。受け皿となる仕事や受入環境と一体で考える必要がある。生駒市は過疎地域とは状況が異なるため、周辺地域への貢献も含め、生駒市で関係人口に取り組む理由や目的を、取り組まない選択肢も含めて整理すべきではないかと思う。

【参加者】 生駒市は、京都・奈良・大阪との距離が近く、古くから交通の要衝であり、生駒山地に守られた地形的な特徴も持つ。東京圏など遠方との関係だけでなく、関西圏とのつながりも重要である。今後は、ベッドタウンという位置づけにとどまらず、生駒市自身の自己定義や周辺地域との関係性を改めて考える必要がある。さらに、副首都構想や南海トラフ地震への備えも踏まえ、広域的な視点から生駒市の位置づけを捉え直す必要があるのではないか。

【参加者】 市内一律ではなく、地域ごとの課題に応じて必要な人材や関わり方を考えることが必要だ。例えば、豊かな自然や茶筌などの伝統産業を有している高山地区、高齢化や人手不足で地域コミュニティの維持が課題となっている住宅地では課題も異なる。10 年単位、20～30 年単位といった時間軸も含めて整理する必要がある。

【参加者】 関係人口を市外の人に限らず、現在の市民との関係を組み直す取組として捉えることもできる。子育てのしやすさや大阪への利便性を理由に住み始めた人の中には、生駒の魅力や地域活動を十分に知らないまま、高齢者になり住み替えを検討する人もいる。現役世代や U ターン、移住者が地域の魅力を知り、人とつながるようなことも関係人口施策として考えられるのではないか。「いこまち宣伝部」など既存の取組とも親和性があり、発展させていく余地があると思う。

【座長】 生駒市は自営業者が比較的少なく、その土地に住み続ける必然性が乏しい人が多いため、ライフステージに応じて住み替えることは自然な流れだと思う。そのような人たちも将来的には関係人口になり得ることを踏まえると、市民も将来の関係人口の担い手として捉える視点があってもよいのではないか。

【参加者】 まさに他のニュータウンが抱えてきた宿命と同じと感じた。生駒市全体では空き家率は高くないが、高齢化が進むニュータウンでは、今後市民の転出や空き家化が

進む可能性があるのではないか。

【座長】 生駒市は比較的早い段階から空き家対策に取り組んでおり、戸建て住宅の流通についても、民間の不動産事業者などと連携したプラットフォームを整備するなど、全国的にも先進的な取組を進めている。住み慣れた地域に住み続けたいという方が多く、現時点では空き家率は高くないが、今後は徐々に住み替えや空き家の増加が進む可能性がある。

【参加者】 「生駒市で関係人口を考える必要があるのか」は根本的な論点だと思う。そのためには、市がどのようなまちを目指し、誰と関係を築きたいのかというビジョンを明確にする必要がある。例えば東吉野村では、一人でも多くの人に関わってほしいという明確な目的がある。一方、生駒市は地域や市民によって状況や意向が異なるため、一律に施策を進めることには違和感がある。まずは、関係人口に取り組む目的を整理し、その上で関係のあり方を考えるべきではないか。また、行政が一方的に関係の形を示し、市民に求めることは慎重である必要があると思う。

【参加者】 ニュータウンを開発してきた自治体では、高齢化や子ども世代の転出により、「一代限りのまち」になることが共通の課題となっている。生駒市全体では人口を維持しているものの、地域によっては将来的にコミュニティの維持が難しくなる住宅地も考えられる。住み継ぐ人を増やすだけでなく、人が継続的に訪れ、関わる仕組みとして関係人口施策を位置づけることも一つの考え方であり、その意味では住宅政策と連動して検討していく必要がある。

【座長】 私も生駒市の立地適正化計画の策定に関わったが、既存住宅地を縮小するのではなく、生駒駅、学研北生駒駅、南生駒駅を拠点とし、駅前への高齢者の住み替えと、戸建て住宅への子育て世帯の入居など、圏域内で人の循環を生み出す方向性を示している。ただし、民間事業者に依存する部分が多い。

【参加者】 駅から離れた住宅地では、民間による再開発が期待しにくい。他地域では、空き家となった団地を若いクリエイターが安価に借り、定住や二地域居住につなげている例もある。生駒市でも活用可能な公的ストックがあるか。

【座長】 生駒市は公的住宅がほとんどないため、他のニュータウンのように公的住宅の建替えに合わせてさまざまな機能を導入するといった手法が取りにくい。そのため、市としては誘導できても、お願いベースの働きかけにならざるを得ない面がある。

【参加者】 福岡県古賀市では、現在は大きな問題がなくても、20～30年後の人口減少や行政サービスの維持を見据え、シェアリングエコノミーを活用した人材確保や公民連携に取り組んでいる。関係人口には、将来の人材やサービスの担い手を確保する側面もある。また、古賀市ではコミュニティバスを隣接自治体まで運行するなど、生活圏を重視した取組を進めている。生駒市でも生活圏は市域を越えて広がっており、企業や周辺自治体との連携も検討するべきである。

【参加者】 「どうすれば関わりたくなるのか」という視点は重要である。関係人口を考える際に

は、誰でもよいのではなく、生駒市として関わってほしい人材を明確にする必要がある。動機は金銭だけではなく、面白さや新規性、自分が活躍できる実感などを含めさまざまな。「関わりしろ」を具体的に設計し、「生駒で何ができるか」というストーリーまで示すことが重要である。

【参加者】 関わりたくなるのは、明確な理想像を持ち、その実現に向けて挑戦しているまちではないか。多くの人に受け入れられることだけを目指すのではなく、生駒市が「こういうまちを目指す」という姿勢が事業や取組を通じて伝わるのが重要である。そうした挑戦があるからこそ、共感した人が集まり、関わりたいと思うのだと思う。ビジョンを明確にすることが、関係人口のあり方にもつながると思う。

【参加者】 ベッドタウンは、ある意味で「家」として人を育む場所だったと思う。その意味で、チロル堂のような子育てやケアを中心とした新しい動きは非常に興味深い。東吉野村の「あと50年は森を諦めない」や、大牟田市の「高齢者が安心して徘徊できるまち」のように、明確なビジョンを掲げることで共感する人材や企業が集まる事例もある。生駒市も「住みやすいベッドタウン」というイメージにとどまらず、新たな価値を示すことが重要ではないか。そうしたビジョンが、共感する人を集め、施策の一貫性にもつながる。

【参加者】 関係人口の「結び先」を明確にする必要がある。誰とでも広く関係を築くのではなく、対象を絞る方が効果的な施策になる。福祉やケアの視点を持つ地域活動が多いのは、生駒らしさを表す活動だと思う。比較的安定した生活基盤や文化的な蓄積が、他者への関心や活動を生み出す土壌となっている可能性もある。

【参加者】 利益や規模の拡大を優先せず、人へのまなざしや感性を大切にする活動が成立している背景には、生駒市の所得水準や文化的な環境も関係しているのではないか。だからこそ、多様性や複雑性を受け入れ、他者に寛容であろうとする価値観が育まれやすいまちなのだろうし、そうした方向性を大切にすることが、生駒市らしさを発展させていくことにつながるのではないか。

【参加者】 奈良県全体に似た傾向があるように感じている。

【参加者】 都に近い場所でありながら、完全に保守本流に収まらないという独自性もあると思う。また、生駒山という存在も大きい。ある種のスピリチュアルな拠点としての側面や、新しい動きが生まれる場所としての意味合いもあるのではないか。

【参加者】 生駒市の方向性を位置づけるビジョンは必要だと思う。ただし、重要なのはビジョンそのものだけでなく、その策定過程である。例えば前橋市では、市の職員が地域に入り、若手の実践者や昔から地域で活動してきた人など、多様な立場の声を聞きながら方向性を整理している。こうしたプロセス自体を開いていくことが望ましい。

(3) 関係人口施策における行政の基本姿勢

【事務局】 (事務局から説明)

- 【座長】 総合計画では「自分らしく輝けるステージ・生駒市」を掲げ、脱ベッドタウンという方向性も示されている。一方、閑静な住宅地としての環境を望む市民も多く、施策全体が同じ方向を向いているわけではない。行政が介入しすぎるべきではないが、地域課題を把握する立場として戦略を描く必要があるのではないかと。例えば、高校卒業後に市外へ転出した若者や市外在住の出身者との関係をつなぎ直すことは、大都市郊外における関係人口施策の一つと考えられる。加えて、生駒市が目指すまちの姿を示し、それに共感する人が市外から応援する「生駒市型の関係人口」も考えていく必要がある。
- 【参加者】 多様な地域を一つの基準、一律の方向性で捉えることには限界がある。島根県雲南市では、地域ごとに自治組織や予算を持ち、それぞれの課題に応じて主体的に取り組み、市は主導するのではなく相談に応じて支援している。地域から新たな産業や取組も生まれている。地域単位で課題や取組の目的を整理し、自主的に動くための予算や場所を行政が支える仕組みは参考になるのではないかと。
- 【参加者】 自治会を中心に進めてきたコミュニティ政策については、大学や企業など、より多様な主体との関係づくりを含めて見直す時期にあるのかもしれない。次世代へ住み継がれるまちにするためにも、多様な主体との関わりが必要という認識はある。
- 【参加者】 市民の中には、自ら主体的に動くよりも、市に何かを求める意識が強い場合もある。外部人材との関わりは、単なる人手の補完ではなく、地域内の人が自らの可能性に気づき、新しい取組を始めるきっかけとなり得る。私自身、自治体と地域産業の活性化に関わる中で、地元事業者と東京などのスタートアップをつなぎ、新たな事業を生み出す取組を行っている。関係人口は、地域内の人が新たな可能性に気づき、自ら動き出すきっかけを生み出す存在として捉えることができるのではないかと。
- 【参加者】 自分たちで考え、決定することが、地域への責任感や主体的な関与につながる。地域が自ら決めて取り組む機会を増やすとともに、市民が市内の地域や活動を知る機会を設けることも有効だ。また、アーティスト・イン・レジデンスのように、外部人材を一定期間受け入れ、地域側も受入れの経験を積む仕組みもある。長期的には人口規模の縮小が見込まれるため、子どもが地域に愛着を持ち、転出後も戻りたいと思える環境や、戸建住宅を多世代で住み継ぐ仕組みを検討する必要がある。

(4) 既存の取組を含めた施策メニューの考え方

- 【事務局】 (事務局から説明)
- 【座長】 市では既に様々な取組を行っており、それらを関係人口施策として位置づけ直したり、見せ方を変えたりすることも考えられる。既存施策に加えて必要な取組や、参考となる他自治体の事例についてご意見をいただきたい。
- 【参加者】 いこまち宣伝部の参加者は、どういった目的や思いを持って活動しているのか。
- 【事務局】 初期は生駒の魅力を発信したい参加者が多かったが、近年は、生駒をもっと知り

たい、地域に知り合いを増やしたいという人も増えている。「宣伝部」という役割が、地域と関わるための入り口になっていると考えられる。昨年度は10周年を機に、宣伝部の卒業生によるトークセッションや写真展示を行った。外部への発信だけでなく、地域との距離ができていた卒業生が生駒を見直し、再び活動を始めたり、新たな仕事につながったりする効果も見られた。

【参加者】 Web サイトでは生まれにくい出会いが、リアルな場では生まれる。市民に生駒で行われている活動を知ってもらい、新たなつながりを生むためにも、こうした場を増やすことが重要だと思う。また、いこまち宣伝部のように、地域の人への取材や写真撮影を通じて生駒を知る取組は、取材される側にとっても、自分たちの活動や地域に関心を持ってもらえることが大きな意味を持つ。さらに、ゲストハウスやシェアハウスなど、外から来た人が滞在し地域と関われる場も必要ではないか。一方で、住宅地への宿泊に抵抗を感じる市民もいるため、行政が取組の意義や方向性を示し、地域の理解を支えることも重要だと思う。

【参加者】 「自分らしく輝けるステージ」は理念が伝わりにくく、「脱ベッドタウン」は強い印象を与える一方、現在の暮らしを否定されたと受け取られる可能性もある。その間をつなぎ、生駒が今後どのようなまちを目指すのかを表す言葉が必要ではないか。生駒には教育分野の取組や外部人材との関わりなど魅力的な動きがある一方で、それらが何を目指してつながっているのかが見えにくい部分もある。12年間続き100人以上が関わるいこまち宣伝部は、方向性をともに考える上で一つの入口になるのではないか。その人たちと、生駒らしさやまちの将来像を考え、そこで生まれた言葉や提案を行政の施策へつなげていく方法も考えられる。

【参加者】 地域内外の人が交わる事例として、鹿児島県の「薩摩会議」がある。地域の未来を考える対話とフィールドワークを組み合わせ、明確なテーマによって外部から多くの人を集めている。また、大阪府八尾市の「ファクトリズム」では、町工場が技術や価値を発信し、外部との関係をつくっている。生駒市でも、いこまち宣伝部を起点に、展示、トーク、マルシェ、フィールドワークなどを組み合わせ、子育てやケアなど共通のテーマを持つ市内外の人が交流する場をつくることが考えられる。そうした積み重ねが、生駒市の新しいビジョンの形成にもつながるのではないか。

【参加者】 既に活動している人や、まちの未来を体現する人を起点に取り組むことは、限られた資源の中では有効である。一方、特別な活動をしていない市民が「自分たちは対象ではない」と感じる可能性もある。活動する人への支援と、より幅広い市民にまちへの関心を持ってもらう取組を、どのように両立させるかが課題ではないか。

【参加者】 「輝いている人が集まるまち」を目指すのではなく、活動していない人にも居場所や関わり方がある、インクルーシブなまちを目指すべきではないか。先進的な活動を支えるプロモーション的な取組と、それ以外の人を受け止めるケア的な取組の両方が必要だと思う。

- 【参加者】 地域活動をしていない市民、既に活動している人、企業などでは、それぞれ関わる理由や求めるものが異なるため、一つの物差しで捉えることは難しい。まず既に動いている人の活動を支え、そこに共感する人や企業が加わり、新たなサービスや機会が生まれ、それを市民が利用することで、さらに次の活動につながるような循環を設計することが重要である。最初から全員を同じ方向へ動かそうとするのではなく、異なる主体を段階的に巻き込む仕組みが必要ではないか。
- 【参加者】 動いていない人に変化を求めるべきではない。「何か活動しなければ生駒市民ではない」という雰囲気を生まないよう、多様な価値観や関わり方を持つ人が、それぞれの形で暮らせることを保障する必要がある。その上で、動きたい人や動き出しそうな人を後押しすることが大切だと思う。
- 【参加者】 チロル堂では、現役の子育て世代に対して「何も言わずに子どもを送り出してくれれば十分」という考え方を持っていると聞いた。寄附や運営は子育てを終えた世代などが担えばよいとの考え方を持っている。地域活動についても、受け手として存在する人も認められるべきであり、全員を積極的な担い手にする必要はない。
- 【参加者】 重要なのは一つの価値観だけを基準にするのではなく、多様な関わり方や生き方を認められる状態をつくることだ。「輝いている人たち」という表現も、目立つ人ではなく、新たな価値観を示す人たちという意味で捉えるべきではないか。
- 【参加者】 活動や事業を行う発信しやすい人だけでなく、一般の市民の人生や経験を聞き取り、記録する「生活史調査」のような取組も考えられる。市民同士が互いの人生を聞き書きとして残すことで、通常は歴史として記録されない地域の暮らしを蓄積できる。また、自分の人生を聞いてもらうことは自己肯定感につながり、他者への理解や寛容さを育てることにもなる。こうした取組を継続することで、市民同士の関係や地域への愛着を育むことができるのではないか。
- 【参加者】 現在、私は月1回ほど宝山寺の参道でカフェを開いている。その中で、生駒にはベッドタウンとは異なる、門前町としての歴史や暮らしの魅力があることに気づいた。現在は高齢の方への聞きとりも行っているが、一人ひとりの人生や地域への思いに魅力を感じている。いこまち宣伝部でも、有名な場所だけでなく、自分たちが面白いと感じた身近な地域の魅力を発見し、共有してきた。こうした内側からの発信を大切にしながら、いこまち宣伝部や市民とともに生駒の将来像を考えることが、市内外の人が「少し関わってみたい」と思う新たな入口になるのではないか。

(5) その他

- 【事務局】 (事務局から今後のスケジュール説明)

3 閉会